

ハーバートにおける祈りの意味¹⁾

船 木 満 洲 夫

(1)

アイザック・ウォルトンがハーバートの言葉として伝えるところによれば、『聖堂』の詩は「神と私の魂との間に生じた多くの霊的争闘の状況」を表現している。²⁾それでその祈りについて書こうとするにあたり、「苦悩(I)」*Affliction* (I)の結びの詩行から出発することにした。

Well, I will change the service, and go seek

Some other master out.

Ah my deare God! though I am clean forgot,

Let me not love thee, if I love thee not.

〔そう、私は勤め先を変えよう、そして／だれか別の主人を探しに行こう／
ああ、いとしい神よ！ 私がすっかり忘れられようとも／私が心からあなた
を愛するのでなければ、私にあなたを愛させないで下さい〕

どこかほかの奉公先を見つけようと気まぐれに浮ついたとたん、たまらず神に呼びかけて、しかもつじつまのはっきりしない口調で自己叱責を表現する。神への不平が一転して自分の側の愛の問題となり、苦しみのさなかに神を愛さねばならぬとの認識に、どうにか達するのである。この自叙伝的な詩において、主に仕えることで初めのうちは喜びに満ちていたのに、そのうちに悲しみが魂を占めて、うめき声やため息を出すまでになり、結局はたてつきながらも主に仕えるのをやめるわけにはゆかない現実が、逆説的に明かされたと言ってよいであろう。苦悩のただ中でこそ、十字架を負った贖い主、人間の悲しみを担ってくれる主に訴える必然性が成り立つ（「苦悩」(Ⅱ)(Ⅲ)参照）。ハーバートにとって神との交わりは、苦悩と贖いを離れては考えられない。これに本質的に関係するのが人間の罪と神の愛である（「苦悶」*The Agonie*参照）。「悲惨」*Miserie*では、人間の愚かさと罪の故に、「主よ、天使たちにあなたの名を称えさせたまえ」(Lord, let the Angels praise thy name), 「わが神よ、人間はあなたの名を称えることはできません」(My God, Man cannot praise thy name), 「人間はあなた

に仕えることはできません」(Man cannot serve thee)と強調するのだが、神の愛について次の連をはさむことを忘れていない。

They quarrell thee, and would give over
The bargain made to serve thee: but thy love
Holds them unto it, and doth cover
Their follies with the wing of thy milde Dove,
Not suff'ring those
Who would, to be thy foes.

〔彼らはあなたのあら探しをし、あなたに仕えるための／契約を破棄しようとする。しかしあなたの愛が／その契約を保持させ、彼らの愚行を／柔和な翼でおおい／あなたの敵になろうとする者たちに／それを許したまわぬ〕

これからして、上述の「苦悩(I)」の結論にも神の愛が働いていると読んでよいはずだ。そして「悲惨」の最後に確認されるように、神との関係は人間一般のことであると同時に詩人自身のことであり、罪による神との敵対もハーバートの内省から出ていることは疑いない。以上の例示だけでも、ハーバートにおいて神の信仰が(従って神との交わりである祈りが)、罪の意識とつまずきの可能性を前提としていることが推察できるのではなからうか。

単純に悲嘆を投げつける「ため息とうめき」*Sighs and Groans*、「家郷」*Home*、「切望」*Longing* は、主題が狭く規定されて成功した作品とは言えないが、³⁾ それだけにそれぞれが、ため息とうめきの中に罪の贖いの血をきわ立たせ、神の愛に貫かれているのが容易にわかる。同じく嘆きを歌っても直接的でなく、より「形而上詩」的と考えられるいくつかの作品に言及しておかねばならない。神に聞いてもらえぬための悲痛な思いを扱った「拒絶」*Deniall* は、魂と神との不調和を各連の最終行が韻を踏まぬことで表わしている詩であるが(最後の連の終りの行で整う)、⁴⁾ その中で「私の弱った心は、まともに(あなたを) 見ることができなくて／傷められた花のように不満顔に／うなだれていた」(My feeble spirit, unable to look right, / Like a nipt blossome, hung / Discontented)と言っているのが、次の「気うつ」*Dulnesse* との関連で注目されてよいであろう。

Why do I languish thus, drooping and dull,
As if I were all earth?
O give me quicknesse, that I may with mirth
Praise thee brim-full!

〔どうしてこんなに気力がなくなっていくのか、うち沈んでうっとりしく／

まるで全身土くれのように？／おお、私に生氣をお与え下さい、喜びでもって／あなたをあふれるほど称えることができるように！]

重苦しい内容が軽快な均衡を得ている。「土くれ」に対して「生氣」は天上に属する。それは地上の罪と病気から放たれて天上の愛を追い求める心にさせ（「星」 *The Starre*, ll. 13—16 参照）、地獄に落とすのとは逆に天上へ引き上げる力をもつ（「花」 *The Flower*, ll. 15—18 参照）。従って「喜び」とともに存分の「賛美」が可能となるのだ。キリストを恋人に見たてた恋愛詩のもじりのようなこの作品は、次のように結ばれる。

Lord, cleare thy gift, that with a constant wit

I may but look towards thee:

Look onely; for to love thee, who can be,

What angel fit?

〔主よ、あなたの贈りものを清めて下さい、変わらぬ才知で／ただあなたの方を見れますように／見るだけです。あなたを愛することなど、だれに／どの天使に適いましょうか？〕

先の「拒絶」で知れるように、沈んだ精神状態では神がまともに見れない。ところでこの詩行はどうであろう。作品の内容から類推すれば、世の恋人たちのように愛し賛美することを願うはずなのに、ハーバートの頭の中で変更があったらしくて、その願望を放棄し、心を正しい方向に向けて愛しようとする姿勢、それにとどめるという *humility* の表現になったことを詩人のイタリックが示しており、こうしてそもそもの嘆きが告白を含む祈願に変わって、一つの宗教的平衡を得たと言えるのである。⁵⁾「私たちは土だ」(We are the earth) と断言して、神が加える苦悩を内部のもぐらにたとえる「告白」*Confession* も、心の奥底を距離をおいて分析してみせる。結局、開けっぴろげな心が苦悩を防止できるのであり、偽りの作りごとの罪が苦悩に便宜を与えているのを自認する。そして告白によって許しが得られることを期して澄んだ心になる誓言をするのだが、理知が出過ぎている感がぬぐえないのではないか。「形而上詩」の特色をなす対立の和合が、凝縮した形で成就されている例を短詩「苦くて甘い」*Bitter-sweet* に見ることができよう。

Ah my deare angrie Lord,

Since thou dost love, yet strike;

Cast down, yet help afford;

Sure I will do the like.

I will complain, yet praise;

I will bewail, approve:

And all my sowre-sweet dayes

I will lament, and love.

〔ああ、いとしく怒り易いわが主よ／あなたは愛し、しかも打ちたもう／投げ倒し、しかも助けたもう／だから私もぜひ同じことをします／私は不平を言い、しかもほめ称えます／嘆きながら、しかも是認します／こうしてつらく楽しい全生涯を／嘆き悲しみ、かつ愛します〕

愛への話しかけに内省を伴うのは例のごとくだ。神の愛と懲らしめに対する応答として、心の内部で不平と賛美から愛にまで、否定と肯定をそのままにきっぱり統合するのは信仰の力にちがいない。最初の行の ‘Lord’ から利かした [l] 音を終りまでもちこんで、 ‘lament, and love’ と軽やかな頭韻の力強い結合を生み、二重性が愛に解消され時間が永遠へと吸収されるようではないか。

(2)

ここで祈りと親近な関係の賛美をテーマとした作品に目を通しておこう。「賛美 (I)」 *Praise (I)* は次のように始まる。

To write a verse or two is all the praise,

That I can raise:

Mend my estate in any wayes,

Thou shalt have more.

〔詩を一二編書くのが私にできる／精いっぱいの賛美です／何とかして私の身分をよくして下さい／そうすればあなたはもっと賛美が得られましょう〕

この作品には、旧約の「詩篇」に由来する神との取り引きの詩法が用いられている。⁶⁾ どの連も ‘more’ で終わっていて、神の求めには十分な賛美ではないとの気持ちを表わしている。上の引用のあとすぐに教会に言及する点が、賛美との関連で注目したいところ。教会に、そして天空にまで飛んで行きたいのだが人間は弱い存在、神の隣りに住むことを口にするのみで、引用中の ‘raise’ に呼応するように、「おお、どうか私を高く上げて下さい」 (O raise me then!) と嘆願して取り引きは終わる。嘆願ずくめのこの賛美の詩は、賛美においても神の力に頼らねばならぬ現在の無力な心境とともに、賛美が神に上げられることに帰着することを告げる。これと対照的な「賛美 (II)」 *Praise (II)* は次の連で始まる。

King of Glorie, King of Peace,

I will love thee:

And that love may never cease,

I will move thee.

〔栄光の王よ、平和の王よ／私はあなたを愛します／そして愛がやむことのないように／私はあなたを動かします〕

愛の持続には神の力が必要。詩人は自分の願いを聞き入れた神に、「だから私の技の限りをつくして／あなたを歌います」(Wherefore with my utmost art / I will sing thee) と言明する。過去に受けた慈悲が賛美の前提になっている点が見逃せない。神は罪も裁きも押さえて自分の味方になってくれたし、前の詩とは異なり「天ではなくて、私の心の中で／あなたを高く上げることができる」(In my heart, though not in heaven, / I can raise thee) のだ。この作品は決意表明の奇数スタンザが 'I' と未来時制、神の慈悲を歌う偶数スタンザが 'Thou' と過去時制というふうに交互に使い分けて、最後の連に現在時制と不定詞を用いる——「とるに足りぬことだ、このようにまずいやり方で／あなたを称え記すのは／永遠すらも短過ぎる／あなたをほめ称えるには」(Small it is, in this poore sort / To enroll thee: / Ev'n eternitie is too short / To extoll thee)。神の大いなる慈悲に対しては、賛美の詩の技法も挫折せざるを得ない。神と人間との関係が罪と慈悲の月並みな文句で表現されていて、⁸⁾そしてまたこの作品も旧約の「詩篇」に倣ったもの⁹⁾のだとしても、現在という時間において、詩人が挫折感を味わうのには humility の色が濃い。賛美が心に関るのは「賛美(Ⅱ)」Praise(Ⅱ)も同様だ。「主よ、私は自ら志してあなたの賛美を語ります／あなたの賛美のみを」(Lord, I will mean and speak thy praise, / Thy praise alone) と切り出して、賛美にこと欠いたら「ため息やうめき」(a sigh or grone) で賛美を絞り出すと明言する一途さ。どんな行為にも宇宙の主動者たる神の愛顧が欠かせない。前の詩と同様に、「私が呼ぶと／あなたはそれを聞きとどけ、さらに多くをなしたもうた」(when I did call, / Thou heardst my call, and more) と過去の話しにもってゆき、自分のすべての涙よりも主の一滴の涙がまさっていたと、満ちあふれんばかりの主の哀れみ、それに教会と主の犠牲の試みに言及する。「だから私は歌います」(Wherefore I sing) と感謝をもって言うのも、前の詩と軌を一にしている。全スタンザが 'more' で終わるのは「賛美(Ⅰ)」と同じだが、その神との取り引きのような効果的なひびきは生んでいない。「賛美(Ⅰ)」と比べて(Ⅱ)(Ⅲ)の作品は、神の慈悲の賛美が不平を圧倒している。

賛美の詩でも「人間」Man や「摂理」Providence は理屈と説明がまさって、ハーバート流に例証を丹念に重ねてゆく手法のもの。「人間」では、「人間はすべて／いやそれ以上」(Man is ev'ry thing, / And more), 「人間は均斉そのもの」(Man is all symmetrie),

「人間は小宇宙」(He is in little all the sphere)と、人間謳歌の思潮に沿って叙述がなされる。そして最後は、人間というすばらしい邸宅に造り主の神が居住することを求め(冒頭の連と符合)、人間に仕える世界と人間の自分らとが、ともに神に仕える僕(しもべ)となれるよう神の助力を請う。感謝と服従でもって、造り主と一体の生き方を待つ姿勢が読めよう。「摂理」では次のように記す。

Of all the creatures both in sea and land
Onely to Man thou hast made known thy wayes,
And put the penne alone into his hand,
And made hin Secretarie of thy praise.

[海と陸のすべての生きもののうちで／人間にだけあなたはあなたの道を知らせ／ただ彼の手にのみペンを委ねて／彼をあなたの賛美の書記にしたもうた]

人間は「この世の高僧」(the worlds high Priest)として万物に代って犠牲をささげるのだから、神をほめ称えぬ者は罪を犯すことになり、詩人は「だから、いとも聖なる霊よ、私はここに／私と私のすべての 同胞のためにあなたに 賛美をささげます」(Wherefore, most sacred Spirit, I here present / For me and all my fellows praise to thee)と言う。万象に働く摂理の意味——神の力と愛、その命令とゆるし——を読みとって賛美するのだが、この賛歌自体この世の代表者として神をほめ称えるのであり、ハーバートが一個人を超えた立場をとるのは、人類全体が恩恵を受けていると考えるからであろう。「摂理」も最初から感謝の心が脈うっており、「感謝」(Gratefulnesse)が唱える「その鼓動が／あなたの賛美となるような心」(such a heart, whose pulse may be / Thy praise)そういう感謝の心が指標として生きていられる。

ただハーバートにおいて賛美は必ずしも単純ではなく、それが内面の心の分析と関連している点が見落とせない。神のやり方と自分のやり方の不可解を並べて対比する「裁き(I)」Justice (I)から、そのあとの部分を引用しよう。

... I do praise thee, yet I praise thee not:
My prayers mean thee, yet my prayers stray:
I would do well, yet sinne the hand hath got:
My soul doth love thee, yet it loves delay.

[…私はあなたを賛美します、でも賛美はしません／私の祈りはあなたを目ざします、でもわきにそれてしまいます／善良にやろうと思いました、でも

罪の方が勝ちました／私の魂はあなたを愛します、でも手間どるのを愛します]

簡明な手法のこの自己非難は、賛美も祈りも愛も罪のために単一にはいかないことを示す。こうした自己卑下はハーバートにいつまでもつきまとうが、個人の経験よりもむしろ一般的な告白の表出ととれるのではないか。前述の「苦くて甘い」に見られる対立の統合にまであまり隔たりはないだろうし、対立を対立として定着し消化する詩の技巧に、ハーバートの独創性を感じさせずにはおかない。友人との対話の形式で自己の寓話化を試みた幻想的な詩「知られざる愛」*Love unknown* では、「苦悩」(*AFFLICTION*)と記した煮え立つ大釜の中に、彼の心が投げこまれたことを話し、また「実際のところ、だらけたものうい精神状態が／しばしばくをとらえ、そのため祈っていても／口は動くのに、心はあとにとどまるというざまだった」(Indeed a slack and sleepeie state of minde / Did oft possesse me, so that when I pray'd, / Though my lips went, my heart did stay behinde)と嘆く。しかし主の贖いの血と愛の働きで貫かれた物語は、それを総括する友人によって次のように結ばれる。

*Wherefore be cheer'd, and praise him to the full
Each day, each houre, each moment of the week,
Who fain would have you be new, tender, quick.*

[だから元気を出せ、そしてそのお方を心ゆくまでほめ称えよ／毎日、毎時間、毎分毎秒ほめ称えるのだ／そのお方は君を新しく柔らかく生き生きとさせようと切望されたのだ]

これは前述の「気うつ」の冒頭を想起させる。嘆きは賛美に転換されねばならぬが、初めに嘆き終りに賛美あり、といったきまったパターンに過ぎぬものではない。ため息をつきながら語る苦悩の物語が、過去の個人的な経験を超えて聖書や聖餐式との関連を深めながら(例えば I. 14 'a stream of bloud', I. 41 'holy bloud'), 対話の技法のもとにむしろ非個人性を濃くしている。距離をおいた心の分析を通じて、神に近づく足場を得ながら神への方向を確認するのだ。それにしても奉獻の意味の賛美の限界は否めないし、それを突破して神に肉迫する祈りの形式が、賛美を補完する究極の機能を担うのでなければならない。

(3)

祈りを主題とするソネット「祈り(I)」*Prayer(I)*は、同格に並ぶ隠喩の羅列から成る定義詩。冒頭の4行は次の通り――

Prayer the Churches banquet, Angels age,
Gods breath in man returning to his birth,
The soul in paraphrase, heart in pilgrimage,
The Christian plummet sounding heav'n and earth;
〔祈りは教会の宴、天使の寿命／誕生に帰る人間の中の神の息吹／魂の言い
贅え、心の巡礼／天と地を測るキリスト者の測鉛〕

祈りは何よりもまず「教会の宴」、これは愛の宴をにおわせずにはおかないだろう（「雅歌」2章4節）。魂にごちそうをふるまう宴であり、祈りは明確に魂の食事を含意する（「四旬節」*Lent* 結尾参照）。これが聖餐式と関ることも疑いなく、聖餐式を扱った作品「宴」*The Banquet* では、聖餐のぶどう酒とパンの芳香が魂を満たす神聖な芳香として受けとられ、そのような芳香を分け与える力は神のみがもつと述べている。そこではぶどう酒が翼となつて、それでもって詩人は空に向かって飛ぶのだが、前出「賛美（I）」の 'I go to Church; help me to wings, and I / Will thither flie' の点線部が Williams 詩稿では 'make me an Angel' となっていたことも考え併せると、「教会…天使…神」（Churches…Angels…Gods）の自然な運びが知れよう。「天使の寿命」については、'Mans age'（「悔い改め」*Repentance*）と対比さるべき句で、天上で神を賛美する天使の超時間的存在の表現ととれば充分だろう（前出「悲惨」冒頭参照）。「誕生に帰る人間の中の神の息吹」は「創世記」2章7節に関係し、墮罪以前のアダムの無垢な心で祈ること、神を常に呼び求める人間の側のあるべき内面の姿をはのめかすであろうか（「匂い」*The Odour*. 2. Cor. 2. 15. 最終連参照）。次の2行においては、天上に属する「魂」の敷衍拡大、地上に属する「心」の天上への「巡礼」が一つになり、「天と地」にキリスト教的な探りを入れるのが祈りとされる（'paraphrase' 'pilgrimage' 'plummet' の頭韻に注意）。キリスト教徒の立場の高唱であり、特に強調したいのだが「天と地」は愛と罪を含むにちがいないし（前出「苦悶」第一連参照）、天地を確と握っているのは主であるから（「犠牲」*The Sacrifice*, 1. 130 参照）、主に祈ることによって天上との交わりの実現を期すると解せるように思う。

つづく4行は次の通り――

Engine against th' Almighty, sinners towre,
Reversed thunder, Christ-side-piercing spear,
The six-daies world transposing in an houre,
A kinde of tune, which all things heare and fear;
〔全能の神に向ける武器、罪びとの塔／地から天に落ちる雷、キリストの脇
腹を貫く槍／六日の世界のひと時のうちの転換／万物が聞いて畏れる一種の

調べ]

祈りが神に対する暴力の性質をもつことは、一般に指摘されているようにダンの説教 (V, 364) に書かれているし、ハーバートは「飛び道具」*Artillerie* でも、涙と祈りが神に向けられた矢で、神と自分がともに射撃手であると叙述している。全能の神と正反対なのが罪であり（「罪 (Ⅱ)」*Sinne* (Ⅱ) 参照）、ここで「創世記」(11章 1—9 節) のバベルの塔の連想をもつ「罪びとの塔」の句を生む。人間の厚かましさに対する神の怒りを表わすのが雷であるが、今や逆に祈りにおける人間の武器となる。次の暴力のイメージの槍は「ヨハネ伝」19章 34節に拠っていて、キリストの贖いと、そしてそこに流れ出た血と水が聖餐式を暗示することが明白だ（前出「犠牲」ll. 246—47, 「苦悶」ll. 13—18; 「神学」*Divinitie*, l. 21, 「招き」*The Invitation*, ll. 11—12）。聖餐によって永遠の生命を受けるという教えの出所は「ヨハネ伝」6章 53—58節で、そのあとの個所からイエスが売られることを自ら予知していることがわかるのであり、その犠牲の血が永遠の生命と結びつく脈絡が理解される（「ヘブル書」9章 12節も参照）。天地の創造には6日要したのに（「創世記」1章）、世界をひと時のうちに変えてしまうという言い方には、安息日の教会における祈りが暗示されているだろうし、音楽の「移調」の意味をもつ ‘transposing’ が次行の ‘tune’ へつながる。「気性 (Ⅰ)」*The Temper* (Ⅰ) の「楽の音をよりよくするための／私の胸の調律」(tuning of my breast, / To make the musick better) は、神意のままに委ねる姿勢を表わすが、こちらではその趣意はとどめながら逆説的な表現になっているととればよからうか。罪びとの意識の強い神への反抗的な祈りであり、つづいて地上から天上的な特性へと視点が急転する。

Softnesse, and peace, and joy, and love, and blisse,

Exalted Manna, gladnesse of the best,

Heaven in ordinarie, man well drest,

The milkie way, the bird of Paradise,

〔柔和、平安、喜び、愛、至福／天に昇るマナ、至上の人々の歓喜／平服の

天、正装の人間／天の川、極楽鳥〕

最初の行に整列した抽象語は、罪が退散した境地をただよわせはしないであろうか（「平安」*Peace*, ll. 35—36 参照）。「天に昇るマナ」は、「ヨハネ伝」の先に言及した直前の個所（6章 49—51節）で知れるように、天より下った永遠の生命であるキリストをはのめかし、高く上げられる意味の ‘exalted’ がキリストに関係することを考えるとき、悔い改めて罪のゆるしを与えられること（「使徒行伝」5章 31節）、栄光を父なる神に帰すること（「ピリピ書」2章 9—11節）が、救い主への祈りのこの凝縮した2語にこめられているかもしれない。なおマナ

は天使の食物であり（前出「犠牲」1. 239 参照——典拠は「詩篇」78篇 24—25節）、このあと詩想が空への方向を具象化するのは無理のない過程と言えよう。このようなマナに関与する祈りは至上の喜悦で、天を日々の生活に引きこみ、人間を天の存在に引き入れることである。「正装の人間」は、自分を生かしてくれるキリストを身に装うことを意味するだろう（「アロン」*Aaron* 参照）。祈りは天上の銀河のようであり、常に空中にとどまる極楽鳥（天の露を常食とすると伝えられる）のようであり、こうして楽園にまで至る（‘softnesse’ ‘blisse’ ‘gladnesse’ ‘Paradise’ の韻に注意）。以上の詩行も教会内の祈りを思わせずにはおかぬ。最後の対韻の2行は次の通り——

Church-bells beyond the starres heard, the souls bloud,
The land of spices ; something understood.

〔星を越えて聞こえる教会の鐘、魂の血／香料の国、それと理解されるもの〕

祈りは天空に鳴りわたる教会の鐘の音、魂のエッセンスの血、喜びに満ちた地上の楽園だと高唱する。キリストの永遠の贖いを表わす血については、聖餐式との関連で前に触れた以外にもハーバートの作品にいくつか言及があるが、要するに罪のゆるしを得させるための契約の血である（「マタイ伝」26章 27—28節）。「魂の血」の句は、「教会の鐘」を通じてひびき合う最初の「教会の宴」と同様の重みをもつのではないか（‘bloud’ へ流れこむこの1行の [b] [l] [d] 音に注意）。最後の謎のような ‘something understood’ は、祈りに関して隠喩による解釈を重ねても尽くせるものではなく、ある程度の真理に迫ることができれば、詩は沈黙とともに終わることを示している。神ならぬ身の到達点なのだが、神との交わりの地歩が定着されたことも事実だ（この2行の [s] [d] 音に注意）。この詩が難解なのは、忘我の境のすれすれのところまで黙想を拡張している点にもあるのではないか。それがまさしくハーバートの祈りなのかもしれない。¹⁰⁾

「祈り（Ⅱ）」*Prayer*（Ⅱ）は次のように始まる。

Of what an easie quick accesse,
My blessed Lord, art thou ! how suddenly
May our requests thine eare invade !
To shew that state dislikes not easinesse,
If I but lift mine eyes, my suit is made :
Thou canst no more not heare, then thou canst die.

〔何とたやすく素早く近づき得ることでしょう／わが聖なる主よ！どんなに突然に／私どもの願いはあなたの耳に入りこむことでしょう！／神性がたや

すさをいとうのでないことを示すために／私がただ眼を上げれば、私の願い
はなされたも同然／あなたは聞きとどけ得ないくらいなら、いっそのこと死
にたもう]

神の傾聴を確信するのでなければ祈りは無意味となろう。このように近づく「たやすさ」
(*Ease*)をまず強調した上で、宇宙の万物を生かす全能の「力」(*Power*)と、進んで罪の犠牲
を引き受けたあの計り知れぬ「愛」(*Love*)を歌う。「力」と「愛」の保証があつてこそ、詩人
は他のすべてを手放しても「いとしい祈り」(*deare prayer*)を同居者として選ぶのである。
ただ神が実際に話すのはハーバートの詩に珍しく(数少ない例の一つが、魂が天国に迎え入れ
られるさまを描いた「愛(Ⅲ)」*Love* (Ⅲ))、そこで神の無言の言葉の解釈が彼には常に必須と
いうことにもなるわけだ。¹¹⁾「祈り」(Ⅱ)の確信は、信仰と祈りの足りなさをどこまでも克服す
る立場に随伴し、その安全保護の役を果たすにちがいない。

罪の贖いによる近づき易さは、ハーバートの祈りの本質に属する。「聖餐式」*The H.*
Communion は Williams 詩稿では、後半4連だけが「祈り」の題名で収録されていた(前
半は Bodleian 詩稿と1633年版に載る)。パンとぶどう酒、キリストの犠牲の人体内への働き
を述べる前半と、キリストの犠牲を得たやすさを主題とする後半とでは、詩形も音調も著し
く異なる。¹²⁾そ前半の4連目は次の通り――

Onely thy grace, which with these elements comes,
Knoweth the ready way,
And hath the privie key,
Op'ning the souls most subtile rooms;
While those to spirits refin'd, at doore attend
Dispatches from their friend.

[これらのパンとぶどう酒に随ってくる恩寵だけが／その早道を知っており
／秘密の鍵をもっていて／魂の最も幽遠な部屋を開ける／一方、パンとぶど
う酒は霊にまで純化されて／自分らの友(恩寵)からの至急報を戸口で待つ]

まわりくどいレトリックだが、罪の贖い主のパンとぶどう酒は、それだけでは魂の戸口でし
か達し得ず、あとは主の恩寵に頼るしかないのだ。ところが単純な韻律の後半はむしろ複雑な
感情を含み、罪のために離れ離れの魂と身体、原罪以前の天国への通い易さに言及したあと、
「あなたは この天国の 血によって／私たちを このたやすさに引きもどしたもうた」(*Thou*
hast restor'd us to this ease / By this thy heav'nly bloud)と、主の犠牲の血で結論
づける。近づき易さは祈りの眼目だが、原罪以前を仮想したりする感情の流れに対して、理

屈が出過ぎたきらいがありはしないか。祈りと題するには不適當にちがいない。「教会の錠と鍵」*Church-lock and key* は Williams 詩稿では、「祈り」の題で上の「聖餐式」の次におかれていたのが、後にハーバートはこれに手を加えて改題するとともに、教会に関する作品群の間に配置したのだった。しかし題名も位置も不適當だとの反論が成り立つだろうし、だからと言って旧題のままでも問題が残ろう。「あなたの耳に錠をかける…」(*locks thine eares*…), つまり願いが聞きとどけられないのは、自分の罪かまたは願いの熱のなさのためだと認めながら、詩人は熱の足りなさを神意のせいにする。

Yet heare, O God, onely for his blouds sake

Which pleads for me:

For though sinnes plead too, yet like stones they make

His blouds sweet current much more loud to be.

〔でも聞いて下さい、おお神よ、私のために弁じて下さる／ただあの方の血のために／というのは罪もまた抗弁はしても、罪は石ころのように／あの方の血の快い流れをいっそう高くひびかせるのですから〕

そもそも錠と鍵は神のものであって罪びとの自由にはならない。神が加える苦悩の「鍵」にはどんな「錠」もあり得ないし（前出「告白」l. 17）、万物にかかっている「錠」を開ける「鍵」は罪びとの嘆願にはない（前出「切望」ll. 47—48）。この作品の最初の行に ‘locks’ の語を入れても、「教会の錠と鍵」と題するのは確かに疑問だ。同時に「祈り」のままでおさまらないと思われるのは、この詩が請願のレトリックに終始していて、しかもそれが神との透徹した交わりをもたらすたぐいのものでないからである。キリストの血に理屈をからませて願うだけでなく、さらに突き進んだ状況での交わりの実在感と、ハーバートの祈りは関るのではなかろうか。

天の神との交わりである祈りには、祈願、告白、感謝、賛美が関係する。しかしそれぞれがそれだけでは祈りを構成するに充分ではない。例えば祈願について言えば、苦悩からの救出を、罪の心の浄めを、神とのじかの近づきを、可能な限りの賛美のできることを願うのがハーバートにおいて普通だが、これらが祈りの意義を満たすには何かが欠けるであろう。また正しい者の祈りは聞かれ、神の意志に従って願うことはかなえられ、しかも神の大いなる慈悲のために願うのだとの教義、さらには罪びとは神に直接に近づくことができぬので、その血によって贖い主となったキリストの名において祈るのだとの教義——こうした基本的な教義からすれば、ハーバートが忠実なキリスト教徒だったことは確かだが、神との交わりを切実に求めれば求めるほど、祈りは彼の詩に問題的な様相を呈さざるを得ない。

「まず神の国と神の義とを求めよ」（「マタイ伝」6章33節）とは、実に祈れということを意味すると言ったのはキルケゴールで、「祈りは沈黙と同時に始まるのではなく、それが正しい祈りとなるならば、祈りは沈黙の中で終わる」と論じる。¹³⁾ 沈黙は神に対する畏敬であり絶対服従であり、祈りとは神の前に沈黙して無となることなのだ。そうだとすれば、祈りについてレトリックを尽くして沈潜しても、おのずから沈黙に終わらざるを得ないのであり、ハーバートの祈りの詩の限界は避けられぬと言えるかもしれない。

彼の詩を読むとき、そのレトリックになじめない感がしないでもない。ところがハーバートの時代の読者は詩とレトリックを同一視し、まだ思想と感情を分極化するに至っていなかったとの指摘がなされている。感情の表現とか自己表現とかと詩を見なすことはせず、言葉によるリアリティの表現と適切な語の探求が最重要だと信じていたのであり、詩人の目標は読者と分かち合える視点から、伝達する主題に照明を当てることだったと説明されるのである。¹⁴⁾

ハーバートの詩は飽くことのない自己吟味に特徴があるが、それが直接的な自己表現でないことは、そのレトリックと非個人性からうかがえよう。前述のように祈りの詩において、生きた教会と罪の贖いの概念が中心を占めている。教会は信仰の一場所であるにとどまらず、キリストの聖体、さらにはキリスト教徒を体現したものとして、祈る教会のイメージを浮き上がらせる。ハーバートのキリストへの帰依は恩寵の体験に根ざしているが、これも自分だけが受けているのではなく、人類全体のこととして、罪と愛そして魂と神の和合が普遍化されるのが彼の詩の傾向である。それにしても彼の信念の揺るぎなさは普通の理解を超えるほどにちがいないし、その彼の信念の守護者として思想上のすべてを仲介和合させる役を担ったのが、イギリス国教会であったと言ってよいのである。¹⁵⁾

※ ※ ※

本稿のために使用した作品集は次の通り。

The Works of George Herbert, ed. F.E. Hutchinson, corr. ed. (Oxford, 1945)

注

- 1) 本稿は「ハーバートの詩」（佛教学大学「人文学論集」第20号）につづく。
- 2) Izaak Walton, *The Life of Mr. George Herbert, 1670—George Herbert: The Critical Heritage*, ed. C. A. Patrides (Routledge & Kegan Paul, 1983), p. 127.
- 3) A. Stein, *George Herbert's Lyrics* (Johns Hopkins Press, 1968), pp. 87—88, 101.
- 4) F.E. Hutchinson, *op. cit.*, p. 504.
- 5) H. Vendler, *The Poetry of George Herbert* (Harvard University Press, 1975), p. 27; A. Stein, *op. cit.*, pp. 100—101.
- 6) C. Freer, *Music for a King: George Herbert's Style and the Metrical Psalms* (Johns Hopkins Press, 1972), p. 170; C. Bloch, *Spelling the Word: George Herbert and*

the Bible (University of California Press, 1985), p.267.

- 7) A. Stein, *op. cit.*, pp.131—33; H. Vendler. *op. cit.*, p.213.
- 8) H. Vendler, *op. cit.*, p.213.
- 9) C. Bloch, *op. cit.*, pp.286—90.
- 10) *Prayer*(I)については E.B. Greenwood, “George Herbert’s Sonnet ‘Prayer’: A Stylistic Study” (*Essays in Criticism* 15, 1965) が参照に値する。
- 11) R. Todd, *The Opacity of Signs; Acts of Interpretation in George Herbert’s ‘The Temple’* (University of Missouri Press, 1986), pp.66, 81—82.
- 12) この点を詳細に論じているのは C. Freer, *op. cit.*, pp.163—170.
- 13) キルケゴール『野の百合・空の鳥』第一部(白水社『キルケゴール著作集』18, 久山康訳, p.186).
- 14) J.R. Mulder, *The Temple of the Mind: Education and Literary Taste in Seventeenth-Century England* (Pegasus, 1969), pp.79—80.
- 15) G. Parry, *Seventeenth-Century Poetry: the Social Context* (Hutchinson, 1985), p.93.